

目次

1	安政四（一八五七）年四月 「人別書上控」	1頁
2	文久元（一八六一）年四月 「人別書上」	89
3	文久二（一八六二）年四月 「人別書上」	189
4	文久三（一八六三）年四月 「人別書上」	269

（以下下巻）

5	元治二（一八六五）年 「人別書上」	
6	慶応三（一八六七）年四月 「人別書上」	
7	明治二（一八六九）年四月 「人別書上控」	
8	明治三（一八七〇）年四月 「人別書上」	

解題 林 玲子

凡 例

- 一 本書は、東京都江戸東京博物館所蔵の石井良助氏収集古文書の中かの、四谷塩町一丁目（現新宿区本塩町）の「人別書上」八冊のうち、上巻として安政四年（資料番号九〇三七三九二八）、文久元年（同九〇三七三九三三）、文久二年（同九〇三七三九三〇）、文久三年（同九〇三七三九三六）の計四冊を翻刻したものである。下巻には元治二年（同九〇三七三九三五）、慶応三年（同九〇三七三九三四）、明治二年（同九〇三七六七三八）、明治三年（同九〇三七三九四一）を収録する。
- 一 本書収録史料に関する解題は下巻に掲載する。
- 一 翻刻にあたり、原本の様式を残すようにつとめたが、編集の都合により、原本の体裁を損なわない程度に、つぎのようにした。
 - 1 文中に適宜、読点（、）および並列点（・）を加えた。
 - 2 漢字は当用漢字・常用漢字にあるものは、これを用い、ないものは正字を用いた。
 - 3 宛字・誤字・衍字はそのまま表記して、右傍に（マ、）を付した。正しい文字がわかる場合は、右傍に（一カ）と記した。
 - 4 変体仮名は、原則として現行の表記にあらためた。ただし、助詞の㊦（え）・㊧（て）・㊨（も）・㊩（は）などはそれぞれ小文字の江、而、茂、者などの漢字に改めた。
- 5 合字はのみ残した。
- 6 欠損、または判読不明の文字は、□□……（字数分）、「」（字数不明）で示し、蝕損などは右傍に（ムシ）と記した。見セ消チ、抹消字で判読可能文字は、そのまま記し、左傍もしくは右傍に塗抹記号××××ないし——を付し、訂正記事がある場合は右傍に示した。また、人名の右傍の——は除籍を示し、朱線の場合は*——*とした。
- 7 踊り字は、漢字は々、平仮名は々、片仮名は、を用いた。大返しは、「く」（字数分）を用いた。
- 8 原文中の行間の補記は、原則として本文中に繰り入れた。
- 9 意味不明箇所については、右傍に（マ、）を付した。
- 10 地名については、『角川日本地名大辞典』（角川書店）、『旧高旧領取調帳』（近藤出版社）、寺名については尾張屋版・近江屋版「江戸切絵図」、寺名・宗派については、『江戸幕府寺院本末帳集成』（雄山閣出版）、『御府内寺社備考』（名著出版）、『復元江戸情報地図』（朝日新聞社）によって確認した。確認できなかった地名、寺名については右傍に（マ、）を付し、誤記と思われる場合は、正しいと思われる地名・寺名・宗派を右傍に（一カ）と示した。ただし、寺の所在地については原文を優先した。
- 11 このほか、前後の年の「人別書上」等記載から、誤記と思われるものには、右傍の（ ）内に正しいと思われる文字を入れ、カを付した。
- 12 朱書は、その文言の前後に*を付した。

13 印形は、㊦・㊧、爪印は（爪で示した。除籍を意味する㊨印は、すべて朱墨のため、朱書の表記をせず、職業・続柄と名前の間に示した。なお、職業・続柄と女性の名前との間にある㊩・㊪は、亡夫の印形である。

14 後筆については判断困難なものがあるため、特に注記を行わず、原文通りの位置に示した。ただし、生国と人名の間の記載は、「」を付してその人物の記述のあとに続けた。また、転出入による追記は、該当箇所そのまま記載した。

15 端裏書・付箋・貼紙・下げ札・鱧（インデックス）・割書・挿入文書などは、その文言を「」もしくは『』内に示し本文中に挿入し、右傍に（端裏書）などと記した。長文の場合は、その箇所に（△）を付し、その人物等の記述のあとに続けた。

一 編集には、林玲子（当館研究員）・岩淵令治（同専門研究員、一九九七年八月まで在籍）があたり、関口かをり（学習院大学大学院生）および当館都市歴史研究室員の協力を得た。